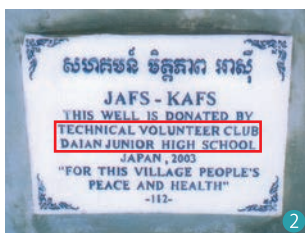


世界の困っている人を助けたい

一年間で部員が作った製品の数は75作品になり、平成27年3月に開かれた販売会では約20万円の収益金が集まりました。この収益金は井戸を建設するための資金としてフィリピンのアンティーク州に寄付しました。これまでに(公社)アジア協会アジア友の会(JAFS)を通して、カンボジアやスリランカ、ネパール、バングラデシュへも寄付をしており、建設された井戸は今回で7基目になります。



①②平成15年、カンボジアのタケオ州バレイ村に建設した井戸。井戸には「大安中学校テクニカルボランティア部」の名前が入っています。
写真提供: (公社) アジア協会 アジア友の会 (JAFS)



③ボランティア活動で優れた成果を挙げたとして、(公財) 修養団主催の平成26年度「SYDボランティア奨励賞」で最高賞の文部科学大臣賞を受賞。

アジアの発展途上国に寄付することになったのは、学校での総合的な学習がきっかけでした。世界には水を得るために困っている人がいるという現状を知った当時の部員が、「自分たちの作った木工製品を販売して、そのお金を寄付しよう」と決めました。

現地から送られてきた子どもたちの喜ぶ写真を見ると、また来年も物作りを頑張ろうという気持ちになります。部員たちにとって困っている人が救われることが、活動の原動力になっているのです。そして改めて「水」の大切さに気づき、安全な水や食料を得られることに感謝できるようになりました。

間伐の必要性を知る

部活の時間には製品作りだけではなく、自分が調べたことを発表する『学習会』を開くこともあります。『学習会』を聞くこともあります。『グハウス』や「危険な生物」など、それぞれが関心のあるテーマについて発表しました。部室には森林関係や環境に関する資料、書籍が並んでいて、自主的に調べることができるようになっています。なかには間伐などの「森林間

①②『学習会』では、調べたことをポスターにまとめて発表しました。



③体育祭での『全校木太鼓演奏』

題“について調べた部員もいました。

間伐とは、暗い林の中では木の成長がおとろえてしまうために、木を間引く(間伐)ことです。木と木の間隔を空けて林の中や地表付近に日光が届くようにします。人の手で植えて育ててきた人工林はこうした手入れをする必要があります。間伐した木は木材として有効に利用しながら、明るくなった林の中では残した木の成長を促すのです。はじめは「木を伐ることは森林破壊なのでは？」と思っていた部員も、学習を通して間伐の必要性を理解して取り組んでいます。また、大安中学校では間伐材を使った『全校木太鼓演奏』というアトラクションがあります。

ごみゼロ実行

作業の時に出る木くずや廃材は、できるだけ再利用するように心がけています。物作りを通して、物を大切にする心や、何でも利用していこうという発想力が養われていきます。

木くずは雑草を生えにくくするため地面に厚くまいたり、生ごみに混ぜて堆肥として使ったりしています。廃材は薪ストーブの燃料になるので、譲ってほしいという地域の人にさし上げています。

「木はごみにならない」と出口先生が話す通り、最後まで無駄なく有効に使い「ごみゼロ」の実行に取り組んでいます。

